

ゲオルク・トラークル試論(三)⁽¹⁾

猪口弘之

IM OSTEN

東部戦線にて(3)

Den wilden Orgeln des Wintersturms
Gleicht des Volkes finst'rer Zorn,
Die purpurne Woge der Schlacht,
5 Entlaubter Sterne.

冬の夜の荒れ狂うオルガンにも
似る、民の暗い怒りは、
葉の落した星々たる
殺戮の 深紅のうねりは。

Mit zerbrochenen Brauen, silbernen Armen
Winkt sterbenden Soldaten die Nacht,
Im Schatten der herbstlichen Esche
Seuzen die Geister der Erschlagenen.

眉を碎かれて 銀色の腕で
夜は、死にゆく兵士たちを招く。
秋のとねりこの蔭で
打ち殺されたものたちの霊がためいきをうく。

10 Dornige Wildnis umgürtet die Stadt,
Von blutenden Stufen jagt der Mond
Die erschrockenen Frauen,
Wilde Wölfe brachen durchs Tor.

(1 165)(2)

町は茨の荒野の帯にとりかこまれている。
血のしたたる階段から、月は駭り立てる、
怖れおののく女たちを。
荒れ狂う狼どもが町の門を突破したのだった。

KLAGE

Schlaf und Tod, die düstern Adler
 Umrauschen nachlang dieses Haupt:
 Des Menschen goldnes Bildnis
 5 Verschlange die eisige Woge
 Der Ewigkeit. An schaurigen Riften
 Zerschellt der purpurne Leib
 Und es klagt die dunkle Stimme
 Über dem Meer.
 10 Schwester stürmischer Schwermut
 Sieh ein ängstlicher Kahn versinkt
 Unter Sternen,
 Dem schweigenden Antlitz der Nacht.

(1 166)

GRODEK(*) (2. Fassung)

Am Abend tönen die herbstlichen Wälder
 Von tödlichen Waffen, die goldenen Ebenen
 Und blauen Seen, darüber die Sonne
 5 Düster hinrollt; umfängt die Nacht
 Sterbende Krieger, die wilde Klage
 Ihrer zerbrochenen Mäuler.
 Doch stille sammelt im Weidengrund
 Rotes Gewölk, darin ein zürnender Gott wohnt
 10 Das vergohne Blut sich, mondne Kuhle;

嘆き

眠りと死、これら陰鬱な鷲どもが
 夜を徹してこの頭をざわめきめぐる、
 人間の金色の像を
 永遠という氷のうねりが
 のみこむのだと。恐ろしい暗礁に
 深紅の肉体が砕け、
 そして暗い声が嘆く、
 海の上で。
 嵐のごとき憂愁の妹よ
 みよ、不安の小舟が沈みゆく、
 星々の、
 夜の沈黙する顔の、下に。

グルデク

夕べに 死の武器のひびきは
 秋の森、金色の平野、
 青い湖にみち、その上空を太陽は
 いっそう陰鬱にころがっていく。 夜は抱く、
 死にゆく兵士たちを、彼らの
 砕かれた口のはげしい嘆きを。
 だが静かに、柳の茂る谷には流れ集まる、
 一人の怒れる神のやとる赤い雲が、
 流された血が、月の冷氣が。

Alle Straßen münden in schwarze Verwesung.
Unter goldnem Gezwieg der Nacht und Sternen
Es schwankt der Schwester Schatten durch den schweigenden Hain,
Zu grüßen die Geister der Helden, die blutenden Häupter;
15 Und leise tönen im Rohr die dunklen Flöten des Herbstes.
O stolzere Trauer! ihr ehernen Altäre
Die heiße Flamme des Geistes nährt heute ein gewaltiger Schmerz,
Die ungebornen Enkel.
(1167)

—

一九一四年三月、第二詩集の組版開始。流産で重態の妹グレート・テをベルリンに見舞う。インスブルックに帰り、絶望感と錯乱の中で、妹のため借金の依頼をするも失敗。五月、《B》の校正の一部をみる（秋には完成したものだと思ひこみ、旧友フィッカーに送付を依頼したりするが、実際の刊行は翌年春となり、ついに手にすることなくおわる）。六月、散文詩《*Offenbarung und Untergang*》を、七月から十月にかけて、本稿冒頭にかかげた三篇をふくむいくつかの詩を書く。フィッカーの斡旋で、ヴィトゲンシュタインの芸術家年金を頒たれる。七月二

すべての街道の通ずる先は黒い腐朽だ。
夜の金色の枝々と星々の下に
妹の影がゆらめいて沈黙する柱をおとてへる、
勇士たちの霊、血をしたたらず頭に 拝礼するために。
そしてひそやかに葦の中で秋の暗いフルートがひびく。
おお、いっそうはごらかな悲しみ！ おまえたち青銅の祭壇よ、
精神の熱い炎を 今日一つのはげしい苦痛がはぐくむのだ、
生れざる孫たちよ。

八日、オーストリア・ハンガリー二重帝国はセルビアに宣戦（第一次世界大戦開始）。八月六日、ロシアに宣戦。二四日、インスブルック衛生隊の薬剤士官補として戦線へ送られ、野戦病院に勤務。ルヴフ附近まで転戦。九月、ロシア軍に敗れて、オーストリア軍は東ガリシア地方より撤退。グルデクで負傷兵の看護にあたり、苦悩。ピストル自殺を企てたが、戦友たちに阻止さる。十月中旬、精神鑑定のためクラクフ（クラカウ）衛戍病院に入院を命ぜらる。二五・二六日、フィッカーが病院に見舞い、かつトラークルの引き取りを軍に願ひ出る。このとき《*Klage*》《*Grodek*》の二篇をフィッカーに朗読してきかせる。二七日、この二篇の原稿をフィッカーあての手紙

に同封して差し出す。十一月三日夜、コカインの服用過多により心臓マヒで死亡。

ゲオルク・トラークルの死の直前に書かれた三篇の詩を〈解釈〉するもっとも簡単なやりかたは、詩とこれらの〈伝記的事実〉をあざり結びつけてしまうことであろう。三篇をなるべく具体的な〈戦争詩〉として読もうとすれば、〈Im Osten〉三行目の *des Volkes finstere Zorn* は〈ドイツ民族の暗黒の憤怒〉、十三行目の *wilde Wölfe* は〈暴虐極りなきロシア兵〉というわけで、全篇はこれ、愛国の心に燃えた詩人の怒りと嘆きと勇士追悼の歌でなければならぬ。〈Grodek〉末尾の三行は、さしずめ〈英霊に臥薪嘗胆を誓う〉というわけだ。

これまで唯一のまとまったトラークル伝を書いたバーズィル⁽⁶⁾は、トラークルが〈皇帝に忠誠で愛国的な市民(ブルジョア)の家庭の生れであって、熱狂の陶酔が伝染的作用をもたらしたことも忘れてはならない〉とし、彼も〈はじめは戦争を内面的に肯定したらしい〉ということによって、そのような〈解釈〉に支点を提供しているかにみえる (*ym 145f.*)。

しかし、*des Volkes finstere Zorn* などの検討はしば

らくおいても、トラークルの作品を少しでもたどった経験のあるものならば、そこには〈愛国の至情〉の発露など一つも見つからないことは知っていよう。出版社クルト・ヴォルフにあてて、〈あの詩の集成⁽⁷⁾に何か別のタイトルをつけてはといわれるのでしたら、あの集成の本来的タイトル『*Dämmerung und Verfall* (薄明と頹落)』を提案します。これは本質的なもののすべてを表現していると思います。』⁽⁸⁾と書き送ったこの詩人には。

そこでバーズィルは、フィッカーの感動的な回想記⁽⁹⁾を想起する。——グルデクの戦闘で、トラークルははじめて配備についたが、九十人もの重傷を負った兵士たちを一人で看護することになって、彼らの苦悶をどうしてやることもできなかった。一人の兵士がピストル自殺をとげ、その脳が壁に飛散するのを見て、ついに耐えがたくなった彼が表に飛び出すと、そこにはスパイ容疑のため絞首されたガリシアの人々がぶら下ってゆれているのだった。ある晩、食卓についていたトラークルは〈私はもう生きてはいられない〉と叫んで、ピストルをつかみ表へ飛出そうとしたが、かろうじて制止された。このようないわば〈敵前逃亡〉行為をしたことによって、軍法

会議にかけられて処刑されるのではないかと、彼はおびえきっていた。：フィッカーが訣れを告げようとしたとき、彼は〈Klage〉と〈Grotte〉を読んできかせ、フィッカーの編集する雑誌《Der Brenner》⁽⁹⁾に掲載する気があるかと尋ねたので、フィッカーはもちろんそれを肯定した。トラークルはまた、バロック詩人ギェンターの詩集をとって、数篇を低い印象的な声で朗読した。その一つの最終行は、〈Oft ist ein guter Tod der beste Lebenslaut〉とさうであった。——(E 200 ff.)

フィッカーは、誠実かつ一種敬虔なまでの友情を示しつづけた人物で、この回想記自体は信頼できる。ことに「へただの人」としてのトラークルの像は歪みなく伝えられている。しかしここから、ともかくある種の愛国心と戦争もやむなしとする気持をもって戦線へ出てきたトラークルも、あまりの悲惨な光景に接して心が逆転し、絶望のためついに自殺した(少くとも自殺を企てた)——という程度の単純な筋書を引き出してみても、やはり彼の詩に接してきたものには到底納得はできない。

バーズイルはそこで次のように考える。——たとえば〈Menschheit〉とさう詩(143)は、一九一二年九月末

ないし十月初に書かれたものであるが(トラークルはこの四月、インスブルック衛戍病院に六ヶ月の見習期間で薬剤士官補として勤務し、現役に復活しようとする。定職を得るためである。この頃、ヘルダーリンの後期の讃歌の影響下に詩作が盛んで、ようやくトラークルの独自性を確立。十月一日、現役復帰認可。だが三十日、早くも予備役編入を申請)、そこにもすでに戦争の幻想的イメージがみられる。〈Im Osten〉は「今やこの幻想が戦慄的きわまる現実となつて、一つのいわば破碎されたヘルダーリン風の鏡にはっきり写つた」もの(ym 147)に他ならない。すなわち、トラークルが本来もつていた「生への厭悪」〈死への親近〉が、東部戦線体験の現実の悲惨と恐怖をきっかけに急激に噴出し、彼の生からの「脱出願望」がここにおいて悲劇的な実現をみたのである。彼が召集に応じたのも、(いくばくかの愛国心は否定できないが)勇み立ってでないことはもちろんで、「苦難の終り、ことによればそもそもすべての終り」を戦争に期待してのことではなかったか。(ym 145)

この修正見解は、一見かなりの説得力をもつ。だが、〈Im Osten〉は、フィッカーの言によると、一九一四年

八月、しかも多分インスブルックで（つまり応召以前に）書かれたものである。原稿の裏面に別の詩をタイプしかけたものがあることなどからみても、これはほぼ確實らしい（II 310）。トラークルは、衛生兵・薬剤士官補としてそれまで二度の兵役を経験しているが、実際の戦闘に加わったことはなく、この詩をいわゆる現実体験と結びつけることは許されないことになる。この詩に対するバーゾイルの〈解釈〉は〈伝記的事実〉の上に組み立てられたものであるだけに、その事実そのものが否定されれば、早くも破綻せざるを得ない。

ではせめて、戦線にあって書かれたことのはっきりしている〈Klage〉と〈Grodok〉を現実体験と結びつけられないものか？——フィッカーによれば、この二篇は一九一四年の九月後半に書かれたものである（II 310 f.）。十月二六日に病院を去ろうとしたフィッカーに朗読してきかせたこと、その翌日付の手紙に添えて（『J』掲載のため）フィッカー宛に送られてきたものであることはさきにのべた。〈お約束した二つの詩の写しを同封します。病院にあなたが来てくださったから後、ぼくは二倍も悲しい気持になっています。自分がほとんどもうこの世の

彼方に行ってしまったような気がするのです。〉と書かれたこの手紙にはさらに、自分が死んだ場合は自分の所有にかかるものはすべて妹グレーテに与えたいと、死の予感（自殺の決意ともとれる）にみちた遺言めいたものまでつけ加えられている（II 316）。ことに〈Grodok〉は、現実のグルデクの名をタイトルとし、そこでの敗北戦での悲惨と恐怖を、さらには風景も実際のグルデク附近の様子を、ともかくも写していることは否定できない。なおフィッカーの記憶によれば、この詩の第一稿（朗読されたもの）の結末部は、第二稿（現存形）のものより二三行長く、そこには die ungeborenen Enkel の運命がもう少し詳しく述べられていたというから、第二稿の成立は死の一週間前で、まさにトラークルの最後の作品である（E 204 f., II 311）。

このような事情をふまえて、〈Grodok〉だけは——〈In Ostern〉〈Klage〉の単なる幻想とは違って——現実体験をぬきにしては考えられないとするのが、三浦氏の論である。彼女は、たとえば die heisse Flamme des Geistes を〈霊の熱い炎、即ち君たち死者の生への激しい欲求と意志〉、die ungeborenen Enkel を〈この戦死という生命

の中断さえなければこれらの兵士が未来において生み得たであろうがへもはや生れることのない存在と解し、かつ両者を等置する。また ein gewaltiger Schmerz は、へなすすべもなく死苦を見送らねばならなかったトラークルの激しい共苦であると考えられる。《Grotdek》には他の二篇にはないまなましさがあると説いた後、彼女はこう結論する。——《Grotdek》における戦争は、トラークル年来の心象の表現であると同時に、戦争の現実そのものでもあって、詩人はそこに自己の内部世界の表現を見出すと同時に、そこで実際に死にゆく兵士らに限りない共苦と哀悼を感じている。この詩における Bilder はそれ故、内部現実の隠喩であると同時に、それ自体独立して存立する具体的現実でもあるという二重性を帯びている。》

幻想と現実のオーヴァラップが形象化された時点をも《Im Osten》から《Grotdek》にずらせたことよって、三浦の論は《伝記的事実》には無理なく符合する。そして、バーズイルの考え——本来生を苦の世界としてとらえ、死へと脱出する希望をもっていた詩人が、現実の戦線での悲惨と恐怖の体験に引金を引かれて、ついにその

願望の悲劇的実現を果たした——をいっそうヒューメインなかたちに修正した。

トラークルの自殺未遂や謎めいた死という現実の問題については、こういうみかたはかなりの程度まで当てているであろう。フィッカーの回想記からもう一つひけば、トラークルは、スパイ容疑で絞首された人々のうちの一人は自分で首に縄をかけたのだったことを知って(彼自身が目撃したのだったかも知れない)、へ人類の悲惨のすべて、ここでそれが一人の人間につかみかかったのです。ぼくは決してそれを忘れることができません。それからあの退却も。つまり混乱をきわめながらの退却ほど恐ろしいものはないのです。》と語ったという。(E 201)。コカインの服用過多による死に關しては、必ずしも自殺とはみられない要因もいくつかあるが、また自殺としても不思議でないようなところもある(フィッカーの回想記に詳しいが、引用は省く)。

しかし、少々先走るが、トラークルにとってへ人類の悲惨とは、《戦争の悲惨》のようないわば現実の眼に見えるものだけではないであろう。彼の自殺(未遂)は、確かに精神錯乱による発作的行動とはかり

はいきれないが、単なる〈厭離穢土〉〈生からの脱出願望〉とは、まして〈欣求浄土〉とはかなり異質なものをもっていると思う。今仮に〈死にゆく兵士ら〉に話を限っても、その死の苦しみに対する共苦や恐怖の感情よりは、むしろ彼らのような存在になりきれない絶望感のようなものが、トラークルをばげしくつき動かしているのではないだろうか。(誤解を受けそうだが、彼の〈自殺〉願望はある意味では、むしろ〈心中〉——無理心中ないしひとりぎめ心中——に近い願望である。) トラークルの伝記や書簡を中心に論を進めて、作品は援用するだけ、にしておけば、ずいぶん楽にいろいろ言えるのだろうが、三篇の詩にもとって、今予断としてあげたようなことをふくめて、考察を進めてみたい。

二

〈Im Osten〉三行目の *des Volkes finster Zorn* が〈愛国心〉とは無縁であるとはいいなながら、検討を棚上げしてきたので、まずこれについて考えることとする。さしあたり、ハイデガーのひそみにならって、キーワードを分析する方法をとる。

Volk という語の用例はきわめて少ないが、*Gewaltig ängstet / Schaurige Abendröte / Im Sturmgewölk. / Ihr sterbenden Völker! / Bleiche Woge / Zerschellend am Strande der Nacht. / Fallende Sterne. (〈Abendland〉, 4. Fassung. I 140); Golden lodern die Feuer / Der Völker rings. / Über schwärzliche Klippen / Stürzt todestrunken / Die erglühende Windsbraut, / Die blaue Woge / Des Gletschers (〈Die Nacht〉, I 160); Ich sah viel Städte als Flammenraub / Und Greuel auf Greuel häufen die Zeiten, / Und sah viel Völker verwesen zu Staub, / Und alles in Vergessenheit gleiten. (〈Drei Träume〉, I 216)* などを拾い出すことができる。

Volk の〈意味〉ないし〈実体〉を求めるためにあげた例であるのに、まず眼に入るのは、本稿でとりあげている三篇の詩と共通の〈詩想〉が歴然としていいることである。一々指摘してゆく紙数はながいが、*Sturm, Gewölk, Woge, zerschellen* などの語の使われかたをみただけでも十分それはわかるだろう。

それはさておき、まず Volk が〈ドイツ民族〉〈ロシア民族〉などは縁もゆかりもないことが明瞭になる。

Völker と複数形でいわれている場合も、それは〈国家〉の構成単位として算えられているのではない。ちなみに、トラークルの全作品の中の、deutsch, Deutschland, Österreich, Vaterland は、ドイツの Staat, Nation などの語は、実にただの一度も現れなっていないのである。

Volk はまた『Barrabas. Eine Phantastie』(I 193f.) に、イエスをさしおいて盗賊ブランに歓呼を送る民衆として現れる。これらの全例に共通なものは、このことは、Volk が死のはかなさを背負いながら、そのうちに自覚を必要としないうちに自然な存在であることにある。

ところで用例探しの範囲をひろめるヴァリアント(推敲段階で消えていった異文)にまでひろげてみると、『Die Schatten sterbenden Volks』(『Abendland』, 3. Fassung: II 257); eines heiligen Volks → eines verstorbenen Volks → eines heimkehrenden Geschlechts (『Offenbarung und Untergang』, II 313) など、事情はさまざま変らなう。しかもこの最後の Volk → Geschlecht という推敲をきつかけに、Geschlecht の用例をたどってみると、やや様相が異なってくる。

Geschlecht という語は、ハイデガーが〈この語は人類

(Menschheit) の意の人間種族 (Menschengeschlecht) をも、また部族・氏族・家族の意味の族 (Geschlechter) をも意味するが、またこれらすべてが、性 (Geschlechter) の二重性の刻印を受けているのだ』(U(23)50) というように、〈種〉〈族〉〈世代〉また〈性〉でもあり、なかなかやっかひである。

この用例をあげてみると、『Erschütternd ist der Untergang des Geschlechts』(『Helium』, I 71); lebend in dunklen Sagen seines Geschlechts (『Verwandlung des Bösen』, I 97); Liebend auch umfängt das Schweigen im Zimmer die Schatten der Alten, / Die purpurnen Martern, Klage eines großen Geschlechts, / Das fromm nun hinget im einsamen Enkel. (『Gesang des Abschiedenen』, I 144); und auf dem Knaben lastete der Fluch des entarteten Geschlechts (『Traum und Umnachtung』, I 147); O des verfluchten Geschlechts. Wenn in befleckten Zimmern jegliches Schicksal vollendet ist, tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus (ebd. I 149); O die Wollust des Todes. O ihr Kinder eines dunklen Geschlechts (ebd. I 149); Hin-

stirbt der Vater Geschlecht (*《Abendland》*, I. n. 2. Fassung. I 399 u. 403) ——等々。

Verfall(en), Untergang, Tod などの Fluch を背負った存在としての (unser) Geschlecht の像が浮び上ってくる。Volk と Geschlecht を機械的に截然と區別することは危険だが、前者は〈死〉や〈ほろび〉までがその〈生〉の一部であるような〈自然〉的存在であるのに対して、後者にはそれは〈呪い〉である。前者は〈国家〉〈国民〉の枠など問題にならないう〈民衆〉(この意味をふまえてならば、〈民族〉とごうてもよう)であるのに対し、後者はその枠を観念的にこえた〈人間種族〉である。ただ〈人間〉〈人類〉(Mensch, Menschen, Menschheit) にまで観念的に上昇を上げきってうならのは(〈宗教〉を経て、奇妙にも〈社会〉〈国家〉の枠の中へひきもどされていなのは)、『Geschlecht が自分の逃れがたく入りこんだもの (unser Geschlecht)』としてとらえられており、かつその逃れがたさとの格闘がつづけられているためである。Volk のような(〈死にゆく兵士たち〉もふくめて)〈自然〉な存在へのあこがれはあっても、ついに同化をとげることにはできず、さりとて超越

的観念に〈救済〉されて現実の共同性に安住することもできない、そのような境位に Geschlecht はあり、それがすなわきトラウクルの境位でもあった。

〈国家〉〈社会〉の共同性に彼が入りこむことをさまたげたもう一つのものとして、〈性〉としての Geschlecht を考えることもできる。とらつても、『Geschlecht とらう語そのものだから〈性〉的なものをとり出さうとすれば、いやちかこじつけめいこく。 Sehr leise sinkt ihr (= der Schwester) Lächeln in den verfallenen Brunnen, / (...): O, wie alt ist unser Geschlecht (*《Unteregs》*, I 81); Und folgend dem Schatten der Schwester; / Dunkle Liebe / Eines wilden Geschlechts (*《Passion》*, I 125); steinern ins Leere hinsank, da in zerbrochenem Spiegel, ein sterbender Jüngling, die Schwester erschien; die Nacht das verfluchte Geschlecht verschlang (*《Traum und Urmachung》*, I 150) などの例では、Geschlecht に〈性〉的なものの二重写しを感じとることができるが、それは Schwester (妹) によるところが多いいことは明らかである。

この Schwester が、トラウクルにおける〈性〉的な

ものの重要な鍵であり、〈Klage〉や〈Grodete〉にもそれが現れるのだから、この語のイメージを追究することはぜひとも必要だが、今回は評論の余裕がないので、いずれ稿を改めて述べたい。ただつまらない誤解を避けるためにあらかじめことわっておくと、ここで〈性〉的という意味は、もちろん〈トラークルの性体験〉とは余りかわりがない。伝記をたどれば、娼婦との出会いや、妹グレーテとの近親相姦の関係などをとり出すことができ、そのような事実だけで、あるいは〈深層心理学〉的・〈精神病理学〉的方法で、詩を分析するつもりはない。またハイデガーとどこかで訣れるはずである。

Volk の一語のためにすいぶん労力を要したが、これだけいろいろな用例を通してみると、冒頭の三篇の詩の表現が、死の直前の戦争体験よりは、トラークルのもっと深部のところから由来するものであること、それは十分みてとれたであろう。繰り返し現れる〈同一〉の語句や詩想を一々とりあげることにはできないが、des Volkes finsterer Zorn の後半の finsterer Zorn が、〈Grodete〉九行目〇 Rotes Gewölk, darin ein zürnender Gott wohnt と、またその下の Magnetische Kühle / Umschwebt

dies stolze Haupt, / Glühende Schwermut / Eines zürnenden Gottes (〈Das Gewitter〉, I 158) と響き合う、〈Klage〉〇二・三行目 Schlaf und Tod, die düstem Adler / Urauschen nachklang dieses Haupt や、十行目 Schwester stürmischer Schwermut につらなる——とつた一つの例だけでも、安易な〈解釈〉に対する歯止めにはなろう。

三

Volk や Geschlecht には、ちぎりに見たように、〈死〉や〈ほろび〉が離れがたくまとわりついていた。このようなどらえかたは、どこに由来するのであろうか？ ein zürnender Gott とじわれる Gott (神) とはなにか？ 今度は、Gott とどう語の用例によらず、まず、バイエルが 〈Im Osten〉に先行する〈戦争の幻想〉の典型としてあげた 〈Menschheit〉 (I 43) から見てみよう。最初の五行は、Menschheit vor Feuerschlünden aufgestellt, / Ein Trommerwirbel, dunkler Krieger Stirnen, / Schritte durch Blutrabe!; schwarzes Eisen schellt; / Verzweilung; Nacht in traurigen Gehirnen: / Hier Evas Schatten,

Jagd und rotes Geld. *よなき時を* 〈*Im Osten*〉に酷似するが、それよりは少々安っぽい。〈*現世地獄絵巻*〉といった感がある。そして果して、この後には Gewölke, das Licht durchbricht, das Abendmahl. / Es wohnt in Brot und Weine in sanftes Schweigen. / Und jene sind versammelt zwölf an Zahl, / Nachts schrein im Schlaf sie unter Ölbaumzweigen; / Sankt Thomas taucht die Hand ins Wundenmal, *よおむるつ*キリスト教的なイメージをもつ詩句が続くのである。

罪深くはかなじへ人類と、宗教的キリスト教的やすらぎの世界の対置——とをみえるこのような構図は、よく初期のドイツの押韻詩(歌)から、容易にととる。Brot und Weink(3) | ひやむい | とを | と | I 30, 33, 45, 69, 102, 107, 144, 281, 287, 372, 374, 383... と、たまたまに十ヶ所くらいはあげられる。この、少くも教会に期待をかけたつらさ、ひやむい、〈*Die tote Kirche*〉(I 256)が、Das Todsgrauen wuchs: Erbarme dich unser——/ Herr! *よ染つ* | *ひやむい* *よな* | Der Priester schreiet / Vor dem Altar; doch übt mit müdem Gesicht er / Die frommen Bräuche — ein jämmerlicher

Spieler, / Vor schlechten Betern mit erstarrten Herzen, / In seelenlosen Spiel mit Brot und Wein. と痛烈なのを見ても知れる。

トマールは幼時から、カトリックとプロテスタントの宗教教育を並行して(一)受けていたが、そこからは〈やすらぎ〉や〈救済〉よりは、人間の〈死〉や〈ほろび〉や〈はかなき〉の最初の自覚への契機を与えられたようにみえる。〈*Menschheit*〉の最終行は聖トマスの各で終ったのだが、彼はイエスの復活を疑った唯一の使徒である(4)。また、彼の全作品中、およそ曇りなくキリスト教的やすらぎの世界を歌った唯一のものとも見える。〈*Ein Winterabend*〉(I 102)——Mancher auf der Wanderschaft / Kommt ans Tor auf dunklen Pfaden. / Gollen blüht der Baum der Gnaden / Aus der Erde kühlem Saft. // Wanderer tritt still herein; / Schmerz versteinerte die Schwelle. / Da erglänzt in reiner Helle / Auf demTische Brot und Wein. —— 9' 十一行目 Schmerz versteinerte die Schwelle. には微妙なかたちがある。この詩の第一稿〈*Im Winter*〉には *よほ* の、O! des Menschen bloßer Pein. / Der mit Engeln stumm gerungen, /

Langt von heiligen Schmerz bezungen, / Still nach Gottes Brot und Wein. 6よしの句 (I 383) がみられ、第一稿の推敲過程には、'O! so bitter ist der Tod. とか、Sinkt von Gottes Haupt bezungen / In den weißen Arm dem Tod' などのヴァリアント (II 176) があつた。

トラークルの詩作品をキリスト教的に解釈しおおせようとした試みもあるが、バーズイルもそれを批判している (im 7 ff. など)。ハイデガーもまた、〈Klage〉〈Grodak〉を例にあげて、トラーケルの詩のキリスト教性につづての判断は「次のように」問わねばならないであろう。——何故、詩人はここで、その最後の言の極度にさせまった中で、神を、また彼がそれほど決定的なキリスト者であるならば、キリストをよばないのか？ 何故、彼はその代りに『妹のゆらめく影』を名指し、その妹を『拝礼(挨拶)するもの』とよぶのか？ 何故、この歌 (Lied) は、キリスト教的救済への確信的見通しをもってではなく、『未だ生ねる孫たち (die ungebornen Enkel' これについては後に論ずる)』をめぐって終むのか？ (…)
『Klage』にめぐって「何故、『永遠』は『氷のうねり』とよばれるのか？ これがキリスト教的な考えだといふの

か？ これはキリスト教的な絶望ですらないのだ。〉(76) ——との批判をのべている。ハイデガーがキリスト教の代りに何をもちこむかは、後でみるとして、この批判自体は確かに正当といえよう。

キリスト教によって真に〈大悟徹底〉〈安心立命〉しているならば、〈死〉は恐怖の対象ではもはやなく、〈罪深くはかない生からの脱出〉〈救済〉として、むしろ喜び迎えるべきものであるはずだ。Geschlecht の用例としてあげた詩句の中にみられる todestrunken, die Wollust des Todes などを、その意味の〈死への親近〉としてとらえることもできようし、死の直前フィッカーに読みかかせたギェンターの詩句〈Oft ist ein guter Tod der beste Lebenslauf〉への震憾的な共感も、それととれなくもない。しかし、〈救済〉を信じ得ない以上、〈死〉も〈呪い〉たることをやめない。さきの句を再度ひこう——O das verfluchten Geschlechts. Wenn in befeckten Zimmern jegliches Schicksal vollendet ist, tritt mit modernden Schritten der Tod in das Haus.
生も死もひとしく呪いという認識は、どこから来るのか？ Volk の用例の中であげた〈Drei Träume〉(I 215f.)

は、一九〇九年の作だが、*Wie Blätterfall, wie Sternenfall, / So sah ich mich ewig kommen und gehen, / Eines Trannes unsterblicher Widerhall— / Doch kommt' ich seinen Sinn nicht verstehen. (...)* Meine Seele schauert erinnerungsdunkel, / Als ob sie in allem sich wiederfände— / In unergründlichen Meeren und Nächten, / Und tiefen Gesängen, ohn' Anfang und Ende. (...) Zum Tage schwellen und wieder vergehn, / Die ewig gleiche Tragödie, / Die also wir spielen sonder Verstehn. と、〈永劫回帰〉のむなしさが歌われている。軽い〈歌〉で、トラークルの独自性はまだなく、明らかに〈幼なさ〉が感じられる。彼は一九〇四年頃からニーチェに傾倒し、やがてさらにランボー・ヘルダーリン（そしてドストエフスキー）の〈影響〉を強く受けていくのだが、この詩での〈永劫回帰〉のとらえかたは、ただかなり観念的で実感を伴わない。この詩の最後には、*Und deren (= der Tragödie) wahnsinnnächtiqe Qual / Der Schönheit sanfte Gloria / Umkränzt als lächelndes Dornenall. と、* やや屈折した形でキリスト教的イメージが添えられているが、木に竹をついだような破綻をみせ

ている。

O, des verfluchten Geschlechts とトラークルをしていわしめるものはなにか？ —— 神の世界のやすらぎに比しての、生の空しさか？ 神の不在か？ 永劫回帰の空しさか？ はたまた、現実生活の窮乏か？ 禁忌を犯した妹グレートとの関係に対する罪悪感か？ 戦争の悲惨さか？ それとも世紀末的虚無感というやつか？

—— いろいろもっとうらしい原因らしきものはあげられるし、詩作品や書簡から探し出そうとすれば、それぞれに〈相当した証拠も現出〉する。それぞれが幾分かずつは当ていようが、決定的ではない。

私にとって一番動かぬものにみえるのは、次のことである。トラークルは、〈国家〉や〈社会〉や〈宗教〉、ありとあらゆる共同性からはじき出されていると、自らを感ずる。詩人としての自己を存在せしめるためには、ありとあらゆるところで、彼はそれと対決しなければならぬ。しかし彼は一方に、そういう自覚などとおよそ無縁な存在、〈自然〉的存在を見る。共同性の中へ入りこむこともできず、かといって自然な存在であることもできず、これから彼の詩は必然的に〈嘆き (Klage)〉とな

る。〈救い〉は見つからないのだから。

〈*Im Osten*〉〈*Klage*〉〈*Grodek*〉における〈戦争〉は、なんと現実性が稀薄であろう。purpurne Woge などという表現のどこに流された血が見えよう。〈*Grodek*〉の初句の *Am Abend...*などは、詩の初句として、*A. B.* の百ほどしかない作品中、九もの詩に現れるものだ(行頭ということなら三十を越える)。どの行もほとんどすべて〈新しい〉ものではない。これほど現実性ぬきに戦争を歌えるのは、〈戦争〉という共同性に批判なしにのっているか(戦争讚美ばかりではなく、反戦の見かけをとることもある)、でなければ、〈戦争〉からも完全にはじき出されているのか、そのいずれかである。トラークルの場合はもちろん後者である。

四

最後に、ハイデガーが〈*Grodek*〉を論じたものを検討しよう。

〈苦痛は、それが精神の炎に役立つときのみ、真の苦痛といえる。トラークルの最後の詩作「品」は《*Grodek*》という。それは戦争詩として名高い。しかしそれ

は限りなく戦争詩以上のものである。なぜなら(戦争詩とは)別のものなのだから。この詩の最後の詩行は、*Die heiÙe Flamme des Geistes nährt heute ein gewaltiger Schmerz / Die ungeborenen Enkel.* という。ここに《孫たち(Enkel)》とよばれたものは決して、本質を失いつつある(verwesend)種族・世代(Geschlecht)に由来する斃れた息子たち(「勇士たち」)の、生れずにおわつた(ungeboren geblieben)息子たちではない。そのようなこと——これまでの種族・世代の継続生殖が中断すること——のみが問題であるのなら、この詩人はそのような終末には歓呼の声をあげるに違いなからう。しかし彼は悲しんでいるのだ。もちろん《いっそう誇らかな悲しみ》をいだいてであり、この悲しみは炎と燃えながら、未だ生れざるもの(der Ungeborene)のやすらぎを観ているのだが。／未だ生れざるものたち(die Ungeborene)は孫たちという。なぜなら彼らは、息子たち、すなわち頽落した(verfallen)種族・世代の直接の子、ではありえないのだから。彼らとこの「頽落した」種族・世代との間には、もう一つ別の種族・世代が生きているのである。〈(U 651f.)

前回の論の三六頁に引用した、少年ヘーリスについて
 のハイデガーの〈解明〉(U 541)と比べてみれば、既
 に明らかのように、〈原初〉と死んでいくよそのの〈原
 初〉と存在を開いていく(entwesen)死者〈たるヘーリ
 ス〉、die ungeborenen Enkel とが密接に関係づけられ
 ていく。——〈それではトララクールの詩作の言語はどの
 ような様態のものか。それは、よそのの(Freudling)
 が先に立って進むあの途上(Unterwegs)に対応する
 (entsprechen) *ハントハイム* 語(sprechen) のである。
 よそのの歩み出した径は、古く変性せる(entartet)種
 族・世代からは、されていく。この径は、とっておかれ
 た原初(die aufbehaltene Frühe)の未だ生れぬ種
 族・世代の下降(Untergang)へとすすんでいく。
 その場所(Ort)を退居(die Abgeschlossenheit)の中
 もつとこのこの詩(das Gedicht)の言語は、未だ生れ
 ぬ人間種族(Menschengeschlecht)が、より静かな本
 質・存在(Wesen)のやそのある初めへ帰郷すること
 に、対応して行く。

例によって、一語一語がハイデガーの存在論にひきつ
 けられ緊張をせられていく、なかなか読みにくい。しか

し要するに、die ungeborenen Enkel のやが、ungeborenen
 は〈生れずにおわった〉〈もはや生れることのない〉で
 はなく、〈未だ生れぬ〉〈未だかくまわれた(noch
 verborgen)〉〈やがて生れねばならぬ〉であり、Enkel
 は頽落(Verfall)からは無縁となった〈真の存在〉でな
 ければならぬ、とごうかうなっていく。

ungeborenen の用例をひもとく。Und Ungebornes pflegt
der eigenen Ruh (〈*Heiterer Frühling*〉, 1. u. 2. Fassung,
 I 50 u. 364); Der Väter gewaltiger Groll, die Klage/
 Der Mütter, / Des Knaben goldener Kriegsschrei / Und
 Ungebornes / Sentzend aus blinden Augen (〈*Das Gewit-
 ter*〉, I 157); die mondenen Plade (以て *グスタフ*) *des
 Ungeborenen* → der weißen Menschen → *der Abgeschiedenen*
 (〈*Gesang des Abgeschiedenen*〉の推敲形。II 263) など。
 逆の geborenen の用例は、Vom Schatten eines Hauchs
 geboren / Wir wandeln in Verlassenheit / Und sind im
Ewigem verloren, / Gleich Opfern unwissend, wozu sie
 geweiht (〈*Gesang zur Nacht*〉, I 223); *Groß ist die
 Schuld* des Geborenen. Weh, ihr goldenen Schauer/
 Des Todes, / Da die Seele kühlere Blüten träumt.

《*Ant*》. I 114): Durch finstere Tat, im *Zwiespalt* *deines Wesens*—/ Ein *Fremdgeborener* und ein Qualbes-
timter / Ein überwundener Sieger. Selbstverlorener, /
Auf eisigen Gipfeln, die dem Menschen fremd, / Ein
Jäger, der die Pleie schickt nach Gott (《*Don Juans*
Tod. Eine Tragödie in 3 Akten》. I 447) などなる。

この「*Ant*」の論を強固にするわけにするよ
うにみえる。最後の「《*Don Juans Tod*》からの例でも、
fremd=ungeboren (U 55) とらえながら「その
Zwiespalt たる所以は納得」するわけである。

しかし、この最後の例は(断片的にしか残っていない
「*Ant*」)「dionysisch Antitz, / In den die Freuden einer
Götterwelt, / Die einst dahinsank, auferstanden schie-
nen / Ein Enkel derer, die die Götter liebten / Und die
das Leben segnet und befreit: / Weh! / Aus dir start
nich des Erdendaseins hohle / Und schmerz(…) Maske
steinern an, / Dahinter Tod und heißer Wahnsinn lauern.
(I 447) ——とらえながら「*Ant*」を「*Ant*」として「*Ant*」
イデガの「*Ant*」からは「*Ant*」の「*Ant*」を「*Ant*」
として「*Die Nacht*》(I 160) の「Unendliche Qual, /

Daß du Gott erjagtest / Sanfter Geist / Aufseuzend im
Wassersturz, / In wogenden Föhren. と共鳴する。

《*生*》と《*神々*の世界》とが至福にみちた調和一致を
みせた世代(《ギリシヤ的》な世代)の《*孫*》でありな
がら、「*もはや*《*苦*》でしかない《*生*》と、「*ほろび*》を
《*死*》の《*呪*》を背負った世代に生れて、「その世代の
中では《*よその*》として、「*神(々)*》を求めつづける
——そういう《*自己*を失い》《*分裂*》した存在の《*悲劇*》
こそが、ここからは読みとられよう。そしてその《*悲*
劇》たる最大の原因は、「*実は*《*己*》に dem Menschen fremd
(人間に対してよそのもの)であることにこそあるのでは
ないか。ゆえなければ「*Weh*, des Geborenen, daß er
stirbe, / Eh er die glühende Frucht, / Die bittere der
Schuld genossen (《*Passion*》, 1. u. 2. Fassung, I 392
u. 395) などという句が生ずるわけはならぬである。

Enkel といふのは「*Ant*」の「*Ant*」の「*Ant*」の「*Ant*」
こそを用例を示せば「*Ant*」の「*Ant*」の「*Ant*」の「*Ant*」
Schweigen im Zimmer die Schatten der Alten, / Die
purrpunnen Martern, Klage eines großen Geschlechts, /
Das fromm nun hingeht im einsamen Enkel (《*Gesang*

des Abgeschiedenen). I 144); goldene Wolke / Folgt dem Einsamen, der schwarze Schatten des Enkels (<Jahr>. I 138); Blau sind die Tage, da der Mensch silbern im Dunkel zurücksinkt; aber sein Schatten bleibt im Kreis der rosigen Enkel (II 276 f. <Traum und Umnachtung> の第一形態を述べた部分); Wo vor Zeiten / Unsere schmächtigen Enkel gegangen / O mein Bruder in dunklen Seufzern ein Nachgeborenes hinstarb → Wo vor Zeiten / Unter frohen Sternen unsere Enkel gegangen / O mein Bruder schweigend endlich ein Vollkommenes ruht (II 194 f. <Untergang>, 3. Fassung のヴァリオンテ)'. なまをあげ得たは。

しかに、最後のののほろろは、→Nachklang eines trunkenen Saitenspiels / Unter Dornbogen / O mein Bruder wandern wir blinde Zeiger gen Mitternacht. なまをあげ得たは、Nachgeborenes→Steinernes, schwächlig→froh なまをあげのくさうしきを示してゐる。そのO ihr zerbrochen Augen in schwarzen Mündern, / Da der Enkel in sanfter Umnachtung / Einsam dem dunklen Ende nachsint, / Der stille Gott die Blauen

Lider über ihn senkt. (<Helian>. I 73); Gegen die Stadt hin, / Wo kalt und böse / Ein verwesend Geschlecht wohnt, / Der weißen Enkel / Dunkle Zukunft bereitet. (<Der Abend>. I 159) なまをあげのエンターの編む月夜をよめる。なまをあげの Des Windes weißer Choral / Singt mondner Menschheit / Untergang→... / Singt ihrer Enkel / Erschütternden Untergang... → / Singt die Taten / Ihrer verfallenen (→Der bleichen→Der schattigen→Verfuchter) Enkel (II 300 f. <Die Schwermut> のヴァリオンテ) は、彼の〈解明〉には致命的であらう。

結局、Enkel は〈直接の子ではなくもう一世代を隔つた孫〉ではあらうが、やはり〈父母祖父母の血をひいた孫〉でもある。それが〈未だ生れていない〉かぎりは、vollkommen であり得るとして、生れるやただちに verflucht なる可能性をも宿命のちやにまっついるわけである。Engel や Knabe との関係をとることも面白いが、これ以上紙数を費すことを避けたら。なお、ungeboren には確かに〈生れずにおわたつた〉ものの悲しみを表すような例もみられ、妹グレーテとの関係を暗示するところ〈解釈〉もあるが、これにつづいても今回はや

れずにおく。

三篇の〈戦争詩〉から、トラークルと〈社会〉〈共同体〉との〈関係〉について考えてみた。ヘルダーリンについてはある程度言及したとはいえ、もう一人常に念頭にあった詩人ツェーランのことにまったくふれる機会がなかったことは残念である。論の方法も、やむを得なかったのではあるが、パーズィルやハイデガーに引きずられすぎたかも知れない。いずれ続稿で果したい課題はなお多い。

- (1) 本稿は、さきに『言語文化 九号』(一橋大学語学研究室 一九七二年)に発表した〈ゲオルク・トラークル試論(二)〉に続くものである。前二回においては、トラークル研究の諸論について、〈言語〉の問題と、彼の作品の成立過程の問題とから、基礎的な検討を行った。今回はそれとは一応独立させて、特集テーマ〈作家と社会〉にあわせてトラークルの死の直前の詩三篇をとりあげた。
- (2) ローマ数字はトラークル全集(Georg Trakl: *Dichtungen und Briefe. Historisch-kritische Ausgabe*. Hrsg. v. Walther Killy u. Hans Szeklenar. 2 Bde. Salzburg: Otto Müller Verlag 1969.)の巻数、マヨラム数字は頁数を示す。
- (3) 三篇の詩の下段に付した訳文は、論の展開のために、

かなり〈直訳〉調の説明的なものにした。〈東方にて〉を〈東部戦線にて〉とするようなことは、〈訳詩〉としては〈意味〉をせまくしすぎているし、その他にもいさゝか割り切りすぎの箇所が多くなっているが、いずれも意図的なものである。

- (4) Gröden Jageifonski (グルデック・ヤギェルンスキー)ポーランド東南部ガリシア地方(カルパチア山脈をへだてて、チュコスロヴァキアに対す)の、ルヴフ(レンペルク)市近郊の小さな町。第一次大戦前はオーストリア・ハンガリー二重帝国領内、ヘーテカーの記述(*Österreich-Ungarn. Handbuch für Reisende*. 29. Aufl. Leipzig: Verlag von Karl Baedeker 1913.)によつて〈地理学的事実〉をあげれば——人口一万四千。二つの湖にはさまれている。当時のガリシア地方は、低湿地が多いため、農林業以外見るべき産業がなごころであった。
- (5) Georg Trakl: *Sebastian im Traum*. Leipzig: Kurt Wolf 1915. (以下、Bと略記する)
- (6) Otto Basil: *Georg Trakl in Selbstzeugnissen und Bildakzenten*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt Taschenbuch Verlag (rowohlts monographien 106) 1965. (ymと略記)
- (7) Georg Trakl: *Gedichte*. Leipzig: Kurt Wolf (Bücherei *Der jüngste Tag*) 7/8) 1913. (Aと略記)
- (8) An den Kurt Wolf Verlag in Leipzig. Innsbruck,

etwa 20.-22. IV. 1913. (I 511)

- (6) Ludwig Ficker: *Der Abschied*. In: *Erinnerung an Georg Trakl. Zeugnisse und Briefe*. 3., erweiterte Aufl. Salzburg: Otto Müller Verlag 1966. (E ヲ略記)
- (9) *Der Brenner. Halbmonatsschrift für Kunst und Kultur*. Hrsg. v. Ludwig Ficker. Innsbruck: Brenner-Verlag. (J ヲ略記)
- (11) 三浦安子 〈ゲオルク・トラークル《Gradak》における現実についで〉(日本独文学会《ドイツ文学》四三号、九七〜一〇三頁。東京 一九六九)
- (12) Martin Heidegger: *Georg Trakl. Eine Erwörterung seines Gedichtes*. In: Merkur, 1953, H. 3. Später in: *Unterwegs zur Sprache* (Pfullingen: Verlag Günther

Neske 1959. - 3. Aufl. 1965) unter dem Titel: *Die Sprache im Gedicht. Eine Erwörterung von Georg Trakls Gedicht*. (U ヲ略記)

- (13) 前回の論の註十五参照。トラークルの〈神〉の、ヘルダーリンのそれとの親近性についてなどは、後日のテーマである。

(14) 〈イエナス来り給ひしとき、十二弟子の一人デドモと称するトマスともに居らざりしかば、他の弟子これに言ふ《われら主を見たり》トマスいふ《我はその手に釘の痕を見、わが指を釘の痕にさし入れ、わが手をその脊に差入るるにあらずば信ぜじ》》(新約聖書ヨハネ伝第二〇章二四〜二五)

(一九七三・一一・九 稿)
(一橋大学専任講師)